

踏み跡 <My Mountains>

九州(脊振山地)	野河内から井原山	No.189
----------	----------	--------

昭和56年1月1日

地方銀行オンラインを中心に金融機関等のサービスを担当していると、大晦日のオンライン終了後のバッチ処理が終わるまでが緊張の時間になる。元日の午前中、バッチ処理が終了するまではいざという時に備えた体制の中に居ることになる。

かみさんと二人の娘たちは千葉の家へ帰ってしまい、年末から気ままな单身生活。

正午、無事仕事から解放されて登山準備を開始。快晴ではあるが、天気図と天気予報とから判断すると晴天は今日限りと思われる。今から出かけて半日山行とするなら、脊振山地に限る。



出発は 13 時 20 分。七隈の自宅から干隈・野芥・重留・・・慣れた国道 263 号線を走って曲淵ダムに 13 時 45 分に到着。帰路の道路凍結を心配して、日当たりのよいトンネル出口の駐車場に駐車。

登山靴に履き替えて 13 時 50 分出発。

頭上は鼻歌が出るような上天気だが、遠くまで見やると徐々に雲量が増えているのがよくわかる。

野河内 14 時 10 分、お店は閉まっていた静寂そのもの。野河内溪谷に入るととたんに景色が変わる。

入口の積雪は 1~2cm、さらに奥へ進むにつれて 3cm 程度になる。三か月ぶり、いやそれ以上の山歩きで、しかも雪があって気を使うせいもあり汗が出てくる。

井原山集落への分岐点 15 時 10 分。水無鍾乳洞 (海拔 678m) 15 時 30 分。朝飯が遅かったので今頃昼飯。チーズロール、バター、ハチミツそれに何よりもありがたいテルモスの熱いお茶。

水無から鍾乳洞にかけて、谷間に信じられぬほどの広い平坦地が広がっている。面白い地形だ。この辺りから積雪は 10cm を越えてきた。

頂上北部の尾根に取り付くと雪は膝を隠すほどの深さ (50cm はあるだろうか)。特に尾根の北側の吹き溜まりでは 70cm もある。時折主稜線で吹き荒れる風の唸り声が聞こえてくるが、目ではかすかにしか見えない。しばらく見つめている内に、雪雲の中に霞んで消えて行った。

ところが、振り返って北側の眺望を確認してびっくり。やや夕焼けが始まった玄界灘、上空にある雲と青空の残骸、玄界灘の手前に広がる福岡の町。

踏 み 跡 <My Mountains>

16時40分「あと10分 当仁小学校」と書いた標識に励まされて最後のラッセル。大腿部を没するほどのラッセルは久しぶりなので疲れる。

飛び出した井原山頂上は海拔985m、平坦な頂上は雨と曇と突風で何も見えないばかりか立っているのも大変な状況。時計を見ると16時50分。頂上を示す標識をひとなでしただけですぐに下山開始。

天気予報からの想定では、この稜線の雨と風がやがて北上して追ってくるに違いない。急ぎ足で往路をたどって鍾乳洞へ。谷間の道は途中から暗闇になってしまい、雪あかりで歩いている内に雨が降り出してきた。

野河内を18時05分に通過し、曲淵の駐車場に18時30分に帰着。

積雪量や風雪など冬山としての大きさを勘案すると、冬の脊振山地は東京周辺の山で言えば奥秩父の2500mクラスの山にも劣らない感じがする。

眺望を楽しむつもりでリバーサルフィルムと300ミリの望遠レンズを準備してきたが、出番はあまりなし。

買い替えたばかりの新しい純毛ニッカーズボンは布地が厚くて過酷な北風にも負けない履き心地だった。

それにしても、午後からの半日山行でこれだけの雪山を体験できる、福岡はほんによかところ。

誰もいない静かな家へ帰って元日の夕食をとりながら考えることは、「今年の山登りの目標」と「明日は天気が悪そうだがどこへ出かけようか」。そしてそんなことを日記にしたためて昭和56年の元旦は閉幕。

以上



福岡の町中からいつも見えている脊振山地を中心とした山並
(昭和55年4月撮影：福岡市早良区野芥のユニード屋上駐車場から)